

# 父権的神に対する憎悪と敗北—W. B. Yeats 論

熊谷直治

## (一)

Existens の語源そのものが人間存在と世界との関係を明白に語っている。「外に立っている」とは、人間と他者的世界との分離を前提としている。他者的世界を自然とよび、また、第二・三人称的世界とよぶことは、客観的なものの認識を問題とする限りにおいて意味を担い、あらためてその認識の方法をとらえ直そうとするときには、人間存在の根源に立ち戻って、Existence の語形成に含まれたその過程の意味を探りだしていかなければならない。

この論考においては、W. B. Yeatsの神話的認識と神に対する基本的な発想をとりあげ、それがイエイツの詩人的存在にとっていかなる意味を担っていたかを探索しながら、Existenceのもつ根源の意味を手繰る糸口としたい。

## (二)

1922年にThoor Ballylee で序文を書き、Stephan Mallarmeの述べた言葉を自分の日記に見出し、象徴的に*The Trembling of the Veil* と表題を掲げたイエイツの自叙伝第一書（四年間）は、1887年から1891年までの時期があげられている。その時期に、イエイツは感情（情緒）と神話について次のように書いている。

「入りくんで複雑な現代人の心理は、それが一人称で話すときに自己中心的に響くように思えた。しかし、素朴な感情は、それが強ければ強い程、すべての人間の感情にますます似てくる。そこで私は、まもなく、個人的になりがちな感情が神話や象徴の広いかたちの中に織りこまれているような多くの詩を書くようになった。」①と。

そしてイエイツの*Uncollected Prose* (1886~1896) の最後の評論は1896年12月に書かれ、*Miss Fiona Macleod as a poet* と表題をつけて書誌*The bookman* に発表されたものであるが、その中で、「現代文学の影響のもとで表現されるときに、不明瞭で法外なものと思われる感情が、古代の伝説や神話と結びつくときそうでなくなる。というのは、伝説や神話は、人間が神秘的なもの、無限なものに思い焦れるところから生まれたからである。」②と述べている。

これらのイエイツの論旨を取り扱う理由は、神話が感情にある明確な<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>かたちを与えるのだとするイエイツの見解を述べるためだけではない。むしろ、明確な<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>かたちとしての表現に到る前に、神々の住まう神話の世界をイエイツがいかに考えていたかを調べてみたいのがその理由の一つである。イエイツの最初の物語詩・『アシーンの放浪』が1889年に出版されて以来、この*The bookman* に発表された1896年までの才月は、確かに神話に対するイエイツの見解を見極める上で重要な時期だと考えらる。コーネル大学のMarcusは、その著書、*Yeats and the Beginnings of the Irish Renaissance* (1970年出版)の中で「アイルランド古代神話と現代アイルランド文学」の項目を設定し、イエイツ初期の神話を土台とした作品がアイルランド文芸運動の中核的役割を占めていたことを論じ、その時期を1885年から1889年として扱っている。この時期は、拙稿において先に引用したイエイツの見解を含みえてい

る年代である。しかし、イエイツが、特定の時期に限って、神話について論考していたとし、その歴史的年代を論ずることは余り重要でない。むしろ、その背後に占めている文学的姿勢とか、発想とかが、現代的な意味をもちうるか否かがなお一層重要なことである。この論考で、イエイツの神話に対する基本的な見解を求めるのも、イエイツが詩作をはじめにあって、詩人としての感情の苦しみを modern psychology とか modern literature といいながら modern なるものを当時問題とし、結極、神話のパターンの中に表現の救いを求めようとしたことが、現代詩に有効な、創造的役割を果たしたとする筆者の見解と結びついているからである。

先のイエイツからの引用文を扱う第二の理由は、イエイツが、「感情は色または音または形またはこれらすべてのものにおいて、その表現を見出すまでは、感情は存在しないし、我々に感知され、生きた現実のものとはならない」③とする感情についての認識を基本的に人間存在の根源的意識と見なし、その表現を神話に求めていったイエイツが、歴史的意識の中に横たわった神と出会うときに、いかなる感情を詩において表現しなければならなかったかを知ろうとするためである。

### (三)

神話に対するイエイツの基本的な見解を知るために、18世紀の近代神話学者ともいえる Vico (1668~1744年) の見解をとりあげることが妥当であり、また、イエイツと Vico との出会いに興味深いものがあると筆者は考える。ただし、『アシーンの放浪』が書かれた時期に、イエイツが Vico の、いわゆる歴史の Cyclical theory を知っていたという記述を筆者は見えていない。しかし、その物語詩の中に歴史的な反復とか循環とかを読みとめることは容易なことである。神話的英雄 Oisín と Irish Christianity の代表者である St. Patrick との劇的な対話の中に異教と Christianity の時代との cycle を読みとめることは重要なことである。しかしこの論考においてはイエイツの神話に対する見解を知るために、Vico の神話に対する見解の一部を取り上げ、両者の見解の類似を述べることにする。

Vico に触れて Herbert Read は次のように述べている。

「…神々を創造したこれらの最初の間人は poets と呼ばれたが、語源からいえば、それは creators (創造者) である。即ち、poets のつくり出したものには、偉大な詩の三つの本質的要素を含んでいた。それは、詩を効果あるものにする荘厳さ、衆多性、そして情緒的力である。詩の性質のまさにあるべきものは次のことだと Vico は結論づけた。即ち、信じうべきものを信じさせることである」④と。(筆者下線) リードの文脈は、詩のあいまいさについての理論を構築するために Vico を引用し、メタフォアとかイメージとかに論を進めているものであるが、Vico の詩的形而上学をふまえているものである。ベルグソンのミスティシズムの本質への探求へと、リードが筆を進めるのも、Vico を媒介としている。ところで、先の引用で下線を引いた文章は、問題とされるべき 神話的意識 の大きな要素であると筆者は考える。しかしそこに論をすすめることはこの論考ではない。むしろ、神々を創造した最初の間人は詩人であったとする平易で基本的な見解を、リードから離れた Vico の立派としてとりあげたいと考える。ただし、一方で、Vico の諸理論の復興者であった Croce が、*The Philosophy of Giambattista Vico* の書において、「神話とは要するに fable (作り話) ではなく、素朴な原初の人達によって構成され、リアルな事実の説明として彼等によってま

さしく考えられたような歴史的記述である」⑤と述べたことをそえておくことが必要だと考える。それは、「信じうべきものを信じさせる」詩と神話の本質と、さらに、神話に潜んでいる真実性、Croce的にいえばWisdomについて我々に示唆してくれるからである。しかし、筆者はこのWisdomについての神話的要素には、今は触れない。先に論点を述べたように、Vicoの文脈として取りあげた見解を先ず第一に重要なものとして取り扱い論旨を進めて行くこととする。

神話のEncyclopediaを編纂しその序文を書いたRobert Gravesの、平易で重要な神話の職能についての見解は、Vicoとイエイツの、詩人と神話に対する関係を結びつけるものである。Robert Gravesは、神話の職能の一つは「子供が尋ね、人をとまどわせる始末にこまる質問に答えることだ。その質問とはWho made the world? How will it end? Who was the firstman? Where do souls go after death? というものだ」⑥と書いている。イエイツはその第一の質問に次のように答えた。

「ある人が、この世界を作ったのは誰なのか、とDruidに尋ねたとき、世界を作ったのはDruidsだと答えた、あのDruidを我々は思いおこす」⑦と。

Druidはアイルランド植民からいた、いわば詩人達である。しかも異教的な魔術師でありながら、初期のアイルランド・キリスト教徒と親しい、頂度ユダヤ人がラビ(rabbi)と呼ばんだ、教師に類似した詩人達であった。

神々を創造した最初の間人は詩人であるとし、また世界を作ったのはDruidだとする、いわば神話に関する基本的な考えは、神々が世界の創造者ではなく、しかも詩人であるDruidによって神々の生命は保ち得たという発想と同一なものである。Vicoの詩人と神話に対する基本的な見解は、ここでイエイツの見解に類似しているものと考えてよいし、これが筆者が考える神話的認識の一つの前提である。(神話的認識を、ここでは神話的意識と区別し、そのことばを厳密に示唆するためにmythos的認識と呼ぶことにする。)

さてイエイツは同じ文脈の中で

「これらの神々は、実に人間よりも賢く、そして美しいのだが、人間が偉大になると、神々よりも強くなる。というのも、人間は、いわば海のあわ立つ波であるからなのだ」⑧とつけ加えている。大海たる「自然」の中に存在する人間の波としての位置づけは、決して見過ごすことの出来ない表現である。だが、神話の中に自己の感情を普遍化させようとし、かたち、即ち表現を求めていくイエイツは、自ら神々を見出し、それが個人的なeventの中の体験から出現したものとして神話を作りだしていくあのDruid僧の「自然」に対する認識をより重要なものと考えている。C. D. Lewis的に言えば、そこにimageの発見者、新しい神話の創造者としてのイエイツを見ることが出来るのである。

ところで、イエイツの想起したDruidの答、即ち、基本的なmythos的認識の中に、ギリシャ的主知主義の発想を横たえている。「言葉と存在」の関係をとらえる思考を読みとらなければならない。表現として言葉をとり扱う詩人の意識の中に、神話を歴史的記述として見る思考方法をとらざるをえなかった時代の発想を横たえてはいはしないか。mythos的認識を求めること事体の本質に、一人称では語りえなくなった言葉の現代性を、いわばExistenceの語形成と同じく根本的に考え直さねばならないとする発想を横たえてはいはしないか。イエイツの場合。mythosはあくまでも「言葉」という語源的範疇に制約されていたのではなかったか。こういった神話的認識に関する筆者の疑問はつきないが、それらは、根本的に、神話

そのものの取り扱いに関わる問題として、改めて考察しなければならない。しかし、ここで、筆者は、mythos の世界に住もうとしているイエイツが、言葉として存在するlogosなる神についていかに考えていたかを対置することによって、イエイツのmythos 的認識の在り方を考えてみたと思うのである。

#### (四)

イエイツの詩篇 *Supernatural Songs* (超自然の歌) は7篇からなり、1934年から1935年にかけて書かれている。この詩篇は、Christian doctrines に対する明白なイエイツの姿勢を示しており、神に向かいあう詩人イエイツの姿をのぞきみることができる。しかもこの詩篇はいわば創造的主体としてのmythos 的認識をふまえたイエイツに、神がいかなる様相で住みつくことになるかという問を残しているものである。

ところで、「詩とは、我々の moods とか、feeling とか、passions とかを、よく知り、理解する一つの方法」⑨であるとする見解があり、従って、このイエイツの詩篇から、神に向かうイエイツのリアルな感情を知ることによって先の論点を解明することが出来るものと考ええる。筆者は *Poets of Reality* を書いた J. Hillis Miller が、神の死こそ多くの20世紀の作家の出発点であったとする見解を正当と考えるが、一方で、イエイツが神と対峙するときの reality に対するものの見方を、憎悪 (hatred) という激しい感情の中に見出したいと考える。創造的客体としての、創造され、総合されたものとしてのlogos 的認識に立ち向かうイエイツの基本的な姿勢は、—Miller 的な表現をするとすれば、神とその創造がイエイツの意識の客観的対象となったといえるかもしれないが—イエイツの persona である Ribh という。いわばmythos 的創造主体者を通して語る劇的なものとしてあらわれる。‘Ribh Denounces Patrick’ とか、‘Ribh considers Christian Love insufficient’ という詩の persona は Ribh である。この Ribh という persona について、イエイツは1934年に書いた *The Ring of the Great Clock Tower* の中で次のようなコメントをつけている。

「Ribh が Trinity (三位一体) について考えていなかったら、私は Ribh を orthodox な人間であると考えていたであろう」⑩と。

この場合の orthodox は、いうまでもなく、Christianity を意味するが、その Christianity と相いれないとする Ribh の三位一体についての考えは、明確に masculine Trinity (父性的神) についての非難として表現され、「抽象的なギリシャ人の愚かさが人を損ねてきた。あの男だらけの三位一体を憶いおこしてみよ」⑪と詩に書いている。St. Theophilus の Trinity についての基本的な考えにその始まりを見るよりも、12世紀中葉のアイルランドのイコンは、細密に masculine Trinity のアイデアを物語っている。そのイコンは、父なる神、赤い十字架上の子、そして聖霊の鳩である。人間や動物の世界、自然や超自然についてイエイツが考える時に、何故に母なるものがこの中に入らないのかが訝しく、その抽象的なアイデアの愚かしさを悲難したのであった。

ふり返って、1931年の詩、‘The mother of God’ 「神の母」を、イエイツの神の本性に対する考えを調べる意味で考察しなければならない。Curtis Bradford がこの「神の母」の詩について、original な原稿をもとに実証的に行った研究を見ると、⑫イエイツ自身はマリア崇拝者でないとしても、一人の女性的 persona—素朴ないなかの女性—が子を宿し、産み、自ら神の母としてその子を見ていくその過程の、重々しい、恐怖の感情を伴う超自然的な

event の中に、いわば母の胎内にいる神なる子を a dark conceit of the artist (芸術家の暗き imagination) としてイエイツは考えていたことを知ることが出来るが、それとともに、イエイツが母のもつリアリテイを実感しつつ、実は、芸術の母体としてのアイデアを、mythos 的認識から logos 的認識へと進めているかのようにさえ考えられる。しかし、イエイツの persona である Ribh は logos 的認識の通常の意味における対象としての神に対して戦いを挑むという、いわば mythos 的認識をもった詩人の、神に対する一種の宗教的感情を、「憎悪」という言葉で表現しなければならなかった。その基本的な理由は、mythos の世界にある母性崇拝のアイデアにある。古代キリスト教と対立する異教的世界の、頂度ギリシャ・ローマの起源の宗教に、インド・ゲルマン的父権の神々と、インド・ゲルマン以前の、農民の崇める母権の神々があったように、イエイツの persona Ribh の世界には、man, woman, child という日常的世界の空間把握、即ち男は太陽であり、女は月であり、子は imagination を宿すべき人間としての地球であるとするアイデアがある。1903年イエイツは、Emotion of Multitude (衆多の感情) と表題をつけたエッセイの中で、emotionについて考えながら「かつてエジプト人は、すべての生物が太陽を父とし、月を母とするとエメラルドの石の上に刻んだではなかったか」⑬とのべたのも、その mythos 的世界を表象している。エメラルドはまたアイルランドの異名でもあるが、この母である月の象徴的姿は、イエイツの最初の詩、「アシーンの放浪」の niamh (旧版では neave) という女性につきまとっていた。⑭アイルランドのケルト神話に触れるとすれば、その母なる神は Danu の女神であろう。しかも Danu は Anu とも呼ばれ、のちに Christianity の St. Brigit (または St. Bride) としてその名を残し、The Mary of the Gael と呼ばれさえもした。

こういった mythos 的認識が Ribh の世界にありながら、一方で Ribh は次のような christianity をもつ persona でもある。1935年の *A Fullmoon in March* と表題を付した詩集の序文においてイエイツは「Ribh のクリスチャニテイは多くの初期のアイルランドのクリスチャニテイのように、エジプトから来たものだが、前キリスト教的な思想を反映している」⑮と述べている。それと1892年出版の *The Countess Kathleen and Various Legends and Lyrics* の序文においてイエイツが述べたことを、この Ribh という persona に被せなければならない。即ち、イエイツは「アシーンの放浪」という詩において、異教的世界が the great impersonal emotions と結びついていると想像し、epos (イエイツは epic といっているが) の中にその感情の表現、即ち言葉を求めたが、この1892年にまとめられた詩は「個人的な思考と感情 (personal thought and feeling) をキリスト教的アイルランドの信仰や慣習と結びつけようとした試み」⑯であると述べているのであり、これによって Ribh という persona の持っている性格が明白なものとなる。Ribh は従って epos の世界を闊歩 (walk) し、真夜中 (in the pitch dark night) に自分の聖なる書物 (holy book) のページをめくりながら⑰自己の感情の真なる声に耳をすませていたのである。その感情こそ父権の神への憎悪であり、その神に対して人類がいだいてきたあらゆる思想への憎悪⑱であり、その hatred なる感情を表現しなければならなかった。根源的に、イエイツにとっての神とは、Trinity とは、母性的要素 (woman) が入らなければならなかったのである。しかも、「私は何故をもって、男、女、出来事を憎悪するのか。」⑲という詩句のいわば反語的な意味は、man, woman or event という余りにも現実的な世界を述べつつ、そのリアルな世界を、例えば sex の世界に見通している Ribh の考えを知るとき、次のことが明らかとなる。即ち、

この、男・女・出来事の世界について人類が作りなしてきた生きた衣裳としての思想、例えば、父権的神である Trinity を憎悪するのであって、Ribh の神は、女性(she)、花よめ(brid)としての霊を、He たる主とともに存在させ、その神は憎悪の対象とはなりえぬはずのものである。②「神への憎悪が霊を神へと近づけるのかもしれぬ」②という詩句の中にある二つの god は、従って Ribh の世界の god と区別された一つの言葉である。この神についての考えの隔りの中に憎悪という感情 (passion) が存在する。「勉め励んで私は憎悪を究める。それというのも、憎悪だけが私の意のままになる感情だからだ」②と詩に記した。

このイエイツの Ribh という、mythos 的認識をもち、また christianity について考えつづけている persona の存在、いいかえれば、イエイツの現実感の中に modern と呼ぶべき、いわばこの論考の中心的な問題点 Existence のもつ分離の意識を見ることが出来るのである。そしてイエイツは存在の根源的意味を問いつめていくときに、自己の感情と言葉と行為を、表現のかたちとして統一された世界を求め、その世界を神話的認識をもちえる Ribh の persona に託しているのである。この Ribh が、アイルランドの初期の詩人達 Druid の意識と結びつくとき、そこに広大な神話的意識が存在しているはずだと考えられる。しかし、イエイツは、mythos 的認識という歴史的意識によってとらえられた神話の限界を出ることが出来たであろうか。イエイツは人生の終末 (at stroke of midnight) に人間の思考の及ばぬ神にはまけるであろう③と宣した。その敗北の意識の中に存在のまさにあるがままの姿がリアルに描き出されてこなければならないのである。

#### Notes.

- ① Elaborate modern psychology sounds egotistical, I thought, when it speaks in the first person, but not those simple emotions which resemble the more, the more powerful they are, everybody's emotion, and I was soon to write many poems where an always personal emotion was woven into a general pattern of myth and symbol. W. B. Yeats: *Autobiographies*. Macmillan, p.151.
- ② Emotions which seem vague or extravagant when expressed under the influence of modern literature, cease to be vague and extravagant when associated with ancient legend and mythology, for legend and mythology were born out of man's longing for the mysterious and the infinite. W. B. Yeats: *Uncollected Prose*, Columbia Univ. Press, p.423.
- ③ Because an emotion does not exist, or does not become perceptible and active among us, till it has found its expression, in colour or in sound or in form, or in all of these, W. B. Yeats: *Essays and Introduction*, Macmillan, p.157.
- ④ Further, these first men who created gods were called poets, which etymologically means creators. And Vico points out that their creations embodied the three essentials of great poetry: sublimity, popularity, and the emotional power which renders poetry effective. The very character of poetry, Vico concludes, is precisely this: to render the impossible credible. Herbert Read: *Collected Essays in Literary Criticism*, Faber and Faber, p.93.
- ⑤ Myth, in a word, is not fable but history of such a kind as could be

- constructed by primitive minds and strictly considered by them as an account of actual fact. Benedetto Croce: *The Philosophy of Giambattista Vico*, Russell and Russell, p.64.
- ⑥ The first is to answer the sort of awkward questions that children ask, such as: 'Whomade the world? How will it end? Who was the first man? Where do souls go after death?' *New Larousse Encyclopedia of Mythology*, Introduction by Robert Graves, Paul Hamlyn, p.v.
- ⑦ We remember the Druid who answered, when someone asked him who made the world, 'The Druids made it'. W. B. Yeats: *Explorations*. Macmillan, p.23.
- ⑧ These gods are indeed more wise and beautiful than men; but men, when they are great men, are stronger than they are, for men are, as it were, the foaming tide-line of their sea. *ibid*.
- ⑨ Poetry, I have suggested, can be a record of the mind experiencing itself, and thus a way of knowing better, of understanding, our moods, feelings, passions. C. Day Lewis: *The Poet's Way of Knowledge and Enjoying Poetry*, Daigakusha, p.27.
- ⑩ I would consider Ribh, were it not for his ideas about the Trinity, an orthodox man. A Norman Jeffares: *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*, Macmillan, p.425.
- ⑪ An abstract Greek absurdity has crazed the man—  
Recall that masculine Trinity. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*, FROM 'A FULL MOON IN MARCH', RIBH DENOUNCES PATRICK, Macmillan, p.556, ll. 1-2.
- ⑫ This rush of questions on the nature of God, now phrased with ultimate refinement, completes the process of making Mary both participant in and observer of the birth of Christ. Curtis. B. Bradford: *Yeats at Work*, Southern Illinois Univ. Press, p.124.
- ⑬ Did not the Egyptian carve it on emerald that all living things have the sun for father and the moon for mother. W. B. Yeats: *Essays and Introductions*, Macmillan, p.216.
- ⑭ And found on the dove-grey edge of the sea  
A pearl-pale, high-born lady, who rode  
On a horse with bridle of findrinny;  
And like a sunset were her lips,  
A stormy sunset on doomed ships;  
A citron colour gloomed in her hair,  
But down to her feet white vesture flowed,  
And with the glimmering crimson glowed  
Of many a figured embroidery;  
And it was bound with a pearl-pale shell

That wavered like the summer streams,  
As her soft bosom rose and fell.

*The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*, THE WANDERINGS OF  
OISIN, Macmillan, p.3, ll. 19–30.

Niamh, and my country far *ibid.*, l. 48. p.5.

‘You only will I wed,’ I cried,  
‘And I will make a thousand songs,  
And set your name all names above,  
And captives bound with leathern thongs  
Shall kneel and praise you, one by one,  
At evening in my western dun.’ *ibid.*, ll. 74–79. pp.7–8.

No mightier creatures bay at the moon; *ibid.*, l. 87. p.8.

- ⑮ His Christianity, come perhaps from Egypt like much early Irish Christianity, echoes pre-Christian thought. *The Variorum Edition of The Poems of W. B. Yeats*. Preface to A FULL MOON IN MARCH, Macmillan, p.857.
- ⑯ The chief poem is an attempt to mingle personal thought and feeling with the beliefs and customs of Christian Ireland; *ibid.*, p.845.
- ⑰ Because you have found me in the pitch-dark night  
With open book you ask me what I do. (ll. 1–2)  
I turn the pages of my holy book. (l. 27) *The Variorum Edition of The Poems of W. B. Yeats*. Supernatural Songs RIBH AT THE TOMB OF BALLE AND AILLINN, Macmillan, pp.554–555.
- ⑱ A darker knowledge and in hatred turn  
From every thought of God mankind has had.  
Supernatural Songs, RIBH CONSIDERS CHRISTIAN LOVE INSUFFICIENT,  
*ibid.*, p.558, ll. 14–15.
- ⑲ Why do I hate man, woman or event? *ibid.*, l. 7.
- ⑳ At stroke of midnight soul cannot endure  
A bodily or mental furniture.  
What can she take until her Master give!  
Where can she look until He make the show!  
What can she know until He bid her know!  
How can she live till in her blood He live! *ibid.*, ll. 19–24.
- ㉑ Hatred of God may bring the soul to God. *ibid.*, l. 18.



② I study hatred with great diligence,

For that's a passion in my own control, *ibid.*, ll. 3-4.

③ At stroke of midnight God shall win: *The Variorum Edition of The Poems of W. B. Yeats*, Supernatural Songs, THE FOUR AGES OF MAN, Macmillan, p.561, l. 8.